

< 曲目解説 >

●ベートーヴェン／ヴァイオリン・ソナタ第9番 イ長調 作品47「クロイツェル」

ベートーヴェン（1770－1827）の作曲したヴァイオリン・ソナタの中では、第5番「春」と並んで知名度が高く、その規模の大きさ・風格から、ヴァイオリン・ソナタの最高傑作とされています。従前の古典派ヴァイオリン・ソナタは、あくまでも「ヴァイオリン助奏つきのピアノ・ソナタ」で、ピアノが主体の曲が多かったのですが、この曲によって、ヴァイオリンとピアノが対等であることを示したのです。

ロシアの文豪レフ・トルストイの小説『クロイツェル・ソナタ』は、この曲に触発・執筆された作品で、また、ヤナーチェクは、この小説に刺激を受けて、弦楽四重奏曲第1番『クロイツェル・ソナタ』を作曲しました。

作曲の経緯は、当時イギリスのプリンス・オブ・ウェールズ（後のジョージ4世）に仕えていたジョージ・ブリッジタワーが、ウィーンで演奏会を行うにあたって、急きょ作曲に取りかかったとのこと。ところが、作曲は初演の幕が開く寸前まで行われ、結局、第1楽章・第2楽章の一部が大まかにだけ書かれた手書きの楽譜を元に即興的に演奏され、第3楽章は、自身の「ヴァイオリン・ソナタ第6番イ長調作品30-1」の終楽章が転用されました。ベートーヴェンは、この曲を当初はブリッジタワーに捧げる予定でしたが、実際にはクロイツェルに献呈されました。ブリッジタワーの証言によると、ある女性をめぐる対立から不仲となったため献呈者をクロイツェルに変えたということです。

第1楽章：Adagio sostenuto - Presto 4分の3拍子～2分の2拍子 イ長調～イ短調

序奏付きソナタ形式。イ長調の重厚な和音で始まりますが、すぐにイ短調に転調し緩やかな序奏が終わります。主部は、イ短調のプレストでヴァイオリンの激しい動きだけでなく、ピアノにも豪華なクロマチックを求めています。展開部は、第1主題の発展で盛りあがりを見せ、ヴァイオリンは重音が活用され、ピアノはユニゾンで単純抑制された役に徹し、随所に Adagio の部分を挟むことで単調さを避けています。

第2楽章：Andante con variazioni 4分の2拍子 ヘ長調

主題と4つの変奏曲。穏やかな主題が提示されたあと変奏が始まります。第2変奏で、ヴァイオリンは高音域で存在を誇示し、第3変奏はヘ短調で奏されます。

第3楽章：Presto 8分の6拍子 イ長調

ソナタ形式。輝かしいタランテラ。終楽章にタランテラを設けるのは中期の作品に多く見られる技法です。適宜拍子を変えて緩徐な部分を挿入することで、タランテラの野卑さを抑えています。

～休憩～

●イザイ／詩曲第3番「冬の歌」 作品15

ベルギーの生んだヴァイオリンの巨匠ウジェーヌ・イザイ（1858－1931）は、ヴァイオリニストだった父の薦めで、早くから音楽的教養を身につけ、リエージュ音楽院、ブリュッセル音楽院、パリ留学で研鑽を積み、1883年帰仏後のコロヌ管弦楽団を従えた演奏会で大成功しました。フランクのヴァイオリン・ソナタを始め、ルクーのソナタ、ドビュッシーの弦楽四重奏曲など同時代人の多くの作品を初演しました。

「冬の歌」は、詩曲と題された作品の中の1曲で1902年に楽譜が出版されました。作曲家の息子アントワーヌ・イザイの著書に、この曲について本人が語った言葉が紹介されています。『なんの悩みもなかった幼少期の日々がもう戻ってこないことを思うとき、ひしひしと感じられる悲しみ、憂愁... そうしたものが、嘆きを思わせる。それでいてどこか冷ややかな旋律へと昇華されてゆく。』

曲は、「中庸のテンポで、遅くはせず」と書かれた調べで始まり、その後テンポは絶えず変化し、拍子も変えながら、変幻自在に進行し、印象主義音楽の玄妙に彩られていきます。

なお、原曲はオーケストラ伴奏です。

イザイの曲で知られているのは、多くのヴァイオリニストがCD録音している無伴奏ヴァイオリンのソナタ6曲でしょう。それぞれ母国を異にする6人のヴァイオリニストに捧げられているのが特徴です。(①ヨーゼフ・シゲティ／ハンガリー、②ジャック・ティボー／フランス、③ジョルジュ・エネスク／ルーマニア、④フリッツ・クライスラー／オーストリア、⑤マチュー・クリックボーム／ベルギー、⑥マヌエル・キログ／ルーマニア)

また、去年は、イザイ生誕160年を記念して、日本イザイ協会による日本初演曲を含む「イザイ音楽祭ジャパン」が開かれました。今後ますます注目を集めていく作曲家ではないでしょうか。ちなみに、本人演奏によるSP録音もあり、孫弟子には石井志都子さんがいらっしやいます。

●フランク／ヴァイオリン・ソナタ イ長調

イザイと同じくベルギー生まれの優れたオルガニストでもあったセザール・フランク(1822ー1890)の唯一のヴァイオリン・ソナタで、最高峰の名曲といえる曲です。いくつかの動機を基にして全曲を統一する循環形式(フランクが得意とした作曲技法で、交響曲ニ短調でも用いられています。)を用いて、晩年の1886年に作曲されました。そして、何よりも特徴的なのは、ベートーヴェンの「クロイツェル」同様、ピアノとヴァイオリンの音楽的内容が対等であり、二重奏曲と呼ぶべき曲となっていることです。

また、この名作を演奏したいという様々な演奏家たちにより、種々の編曲版が愛奏されています。アルフレッド・コルトーは全曲をピアノ独奏用に編曲し、ほかにも、フルート編曲版、チェロ編曲版は、頻繁に演奏されています。ピアノ・パートがオーケストラに編曲されたコンチェルト版では、フランクの世界が更に壮大に展開されています。

第1楽章：Allegretto ben moderato 8分の9拍子 イ長調

展開部のないソナタ形式によっており、属九の和音による開始は非常に印象的です。

第2主題はもっぱらピアノのみによって奏されます。

第2楽章：Allegro 4分の4拍子 ニ短調

ソナタ形式によるきわめて情熱的な楽章で、ピアノ、ヴァイオリン双方に高度な演奏技術が要求されます。

第3楽章：Recitativo-Fantasia (ben moderato) 2分の2拍子

「幻想的な叙唱」と題された自由な形式による楽章。調性表記は無いが、転調を重ねて最後には嬰へ短調で終結します。

第4楽章：Allegretto poco mosso 2分の2拍子 イ長調

ヴァイオリンとピアノのカノン風の楽想による自由なロンドソナタ形式。最後を飾るにふさわしい輝かしいフィナーレです。